

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

Rising up, TOHOKU!

2016年(平成28年)12月16日 金曜日

無料

## 第55号

毎月発行

発行 2016年(平成28年)12月16日 金曜日



大観衆

## 東京・虎ノ門に大観衆集う 「東北六魂祭」が東京進出 11.20 東京 新虎まつり

「東北六魂祭」に東  
京で会えた  
まさか、「東北六魂祭」

東京で会えるとは思わなかった。東北六魂祭の県庁所在地を順番に回って六年を過ぎて、もうこのイベントも終わつたときびしい思いもし、「東北六魂祭」のことをすっかり忘れかけていた。そんなとき、東京都広報誌に、「新橋・虎ノ門エリアを舞台に、東京や東北などの持つ文化の魅力を世界に向けて発信する「TOKYO SHINTORA MATSURI」のメインイベント「東北六魂祭パレード」の観覧者募集」という記事を偶然に見つけた。

驚いたとともに、とてもうれしかった。東京都民はすでに3・11のことなどすっかり忘れてきているだろうと



秋田竿燈まつり

「東北でもっとすご  
かったんですか？」  
報道陣受付後に、取材工

思い込んでいたところに、ふいをつかれた感じだった。そこで筆者も、単なる観衆の一人ではなく、当然ながら報道陣に加わり、取材することとした。

リアに案内されたとき、今般の踊り手は総勢370名ほどと聞かされた。筆者が東北の現地で「六魂祭」取材したことを関係者に話したら、「東北ではもっとすごかったんですか？」と逆質問を受けた。当然だと返答しようとい心では思ったが自制した。



青森ねぶた祭り



山形花笠まつり

東北での参加者は、新虎まつりのパレードの規模の十倍は下らない。しかし、そうしたこじんまりした規模の練り歩きでも、観衆は観覧席から総立ちで六魂祭パレードに声援を送っていた。

東北の祭りはPR不足  
いつもながらの感想だが、どうして東北のPRは控え目すぎるのだろうか。こんなに喜んでくれるのであれば、現地に来たらもっともっとすごいパレードですよ、祭りはこれだけではありませんと、どうし



盛岡さんさ踊り



福島わらじまつり

て宣伝しないのかと思うのである。でしゃばる必要は毛頭ないが、控えめすぎるのも良くない。控えめどころか、これでは開催があることさえうまく伝わらない。

小池東京都知事の  
あいさつを聞き  
ぞびれた  
今回は、所用があり、午後の部しか取材できなかった。そのため、まことに残念ながら、小池東京都知事のあいさつを聞き逃してしまった。



仙台すずめ踊り



夕暮れの岩手山



昼間の岩手山



紅い実



綿毛

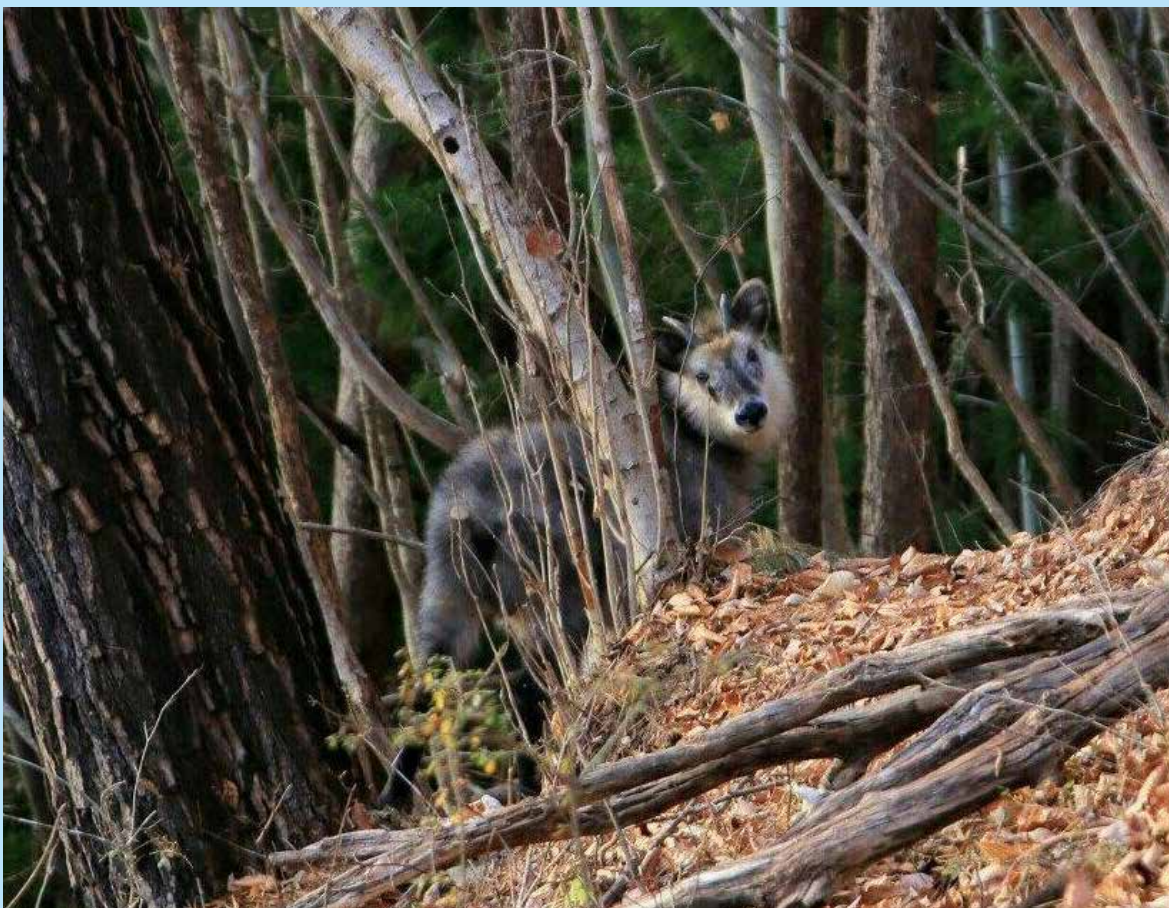
写真でお伝えする  
東北の初冬(岩手)  
写真撮影: 尾崎匠



枯葉の巨木



砂防ダムの枯れ木



カモシカ



背の高い木



《三陸酒海鮮会渋谷》  
はこんな会です！  
東北地酒と三陸海鮮  
盛り沢山

三陸酒海鮮会・渋谷(11/19)の東北地酒ラインアップ紹介

上記の右から地酒銘柄と産地

- ① 「雪の矛盾」(秋田)
- ② 「乾坤一」(宮城)
- ③ 「浦霞」(宮城)
- ④ 「口万」(福島)
- ⑤ 「栗駒山」(宮城)
- ⑥ 「酉与右衛門」(岩手)
- ⑦ 「栄川」(福島)
- ⑧ 「まんさくの花」(秋田)

上記の右から地酒銘柄と産地

- ⑨ 「初孫」(山形)
  - ⑩ 「一の蔵」(宮城)
  - ⑪ 「南部美人」(岩手)
  - ⑫ 「大山」(山形)
  - ⑬ 「山和」(宮城)
  - ⑭ 「南部関」(岩手)
  - ⑮ 「太平山天巧」(秋田)
- 以上 15 銘柄

複数の東北復興関係者やアメリカ大使館員なども参加し参加者の裾野拡大中



毎回いろんな人が参加する



鍋は最高

これまでのPR不足を反省して、この記事を書くことにいたしました。  
掲載写真を見てお分かりいただけるように、この会はホリユーム満点で、東北のたくさん地酒銘柄が飲み放題、おかずも鍋あり、豪華な刺身あり(カレイ、アイナメなど高価)、先付けがホヤの酢の物、他にも盛り沢山です。これだけ飲んで食べて、税込み五千円。さらに田森くんという新進鋭のミュージシャンによるミニコンサートまで無料で楽しめます。  
何より、これだけ楽しんで上に、東北復興の役に立

てるという志高い目的も果たせるというおまけもついできます。  
前回は、東北復興関係者が複数ご参加、アメリカ大使館員もご参加いただけ参加者の裾野がどんどん拡大しております。  
主催者側としてまことにおがましいのですが、3・11を忘れない企画とはこうした気軽に楽しめ、しかも中身も堪能でき、交流もできるイベントではないかと自負しております。  
たくさんみなさまのご参加をお待ちしております。  
次回は年明けの一月二十一日開催です。



先付けがホヤの酢の物！



刺身は豪華版



田森ミニライブもあり

## 盛大な最終回終わる(第21回三陸酒海鮮会・日本橋) 開始から足かけ四年に亘り大変ありがとうございました



乾杯の音頭

十二月一日、三陸酒海鮮会・日本橋の最終回は無事終了いたしました。足かけ四年に亘り、多くの方々のご参加をいただき、ありがとうございました。また、この会を支えてくださいました「ささや」さんのオーナーはじめスタッフの方々にも大変お世話になりました。紙面上から厚く御礼申し上げます。毎回、おいしい東北の地酒と、オーナー自ら包丁をふるって料理していただいた三陸の海鮮は、参加していただいた皆さんの記憶に永久に残ると思います。今後はこの記憶をベースに、各家庭で、東北地酒と三陸海産物を堪能して、少しでも東北の復興に貢献していただくことを願っております。



いつものコアメンバー



七福神もうまい



常連の日高見



豊盃はうまかった



最後のツーショット



完成品

### 第28回 水産業再興のための料理レシピ紹介 【タラの甘酢和え】

生パインに盛り付けて食欲そそり美味しそうです!!



おいしそうな鱈



郷土料理愛好家  
松本由美子氏

#### 一簡単レシピ

【材 料】 タラ 2切れ、玉ねぎ 1/2、ピーマン 1個、人参 70g、生パイン 200g、酒 大1、醤油 大1、黒酢 大1、はちみつ 小1、中華味 適量、ケチャップ 大1、塩、コショウ、片栗粉

【作り方】 ① タラを一口大にカットし、塩、コショウで下味をつけて片栗粉をまぶす  
② 人参、玉ねぎ、ピーマンは乱切りにする。  
③ フライパンで魚を両面をカリッと焼きます。人参はレンジで1~2分加熱しておきます。  
④ フライパンで野菜を炒め、タレを入れてアルコールをとばす。  
⑤ 片栗粉でトロミをつけたら、最後に魚とパインを入れて、さっくりと混ぜ合わせます。

# 奥会津に学ぶ 地域の支え合い

## 奥会津で開催された 「全国サミット」

11月26日(土)、27日(日)に奥会津4町村で「第4回町内・集落福祉全国サミット in 奥会津」が開催された。今回、会場となった4町村のうち、メイン会場となる金山町は高齢化率が実に59.1%、交流会と分科会が開催された2つの町村昭和村が55.3%、三島町が51.4%と、高齢化が進んでいる東北の中でも、奥会津のこれらの3町村だけが高齢化率50%超のいわゆる「限界自治体」とされている。

その第4回がこの奥会津で開催されたことはとても意義深かったと思う。奥会津は高齢化、人口減少が進む一方、医療や介護の地域資源は決して十分とは言えない地域である。豪雪地帯でもある。にも関わらず、そこに住む人々が生活を続けていけるには訳がある。この地域では、人々の日常のつながりと支え合いがその生活を支えているのである。

現在、「地域包括ケアシステム」という、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目前に、たとえ重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される仕組みが市町村ごとに構築されようとしているが、奥会津の日常のつながりと支え合いは、この地域包括ケアシステムの構築にとって

て大きなヒントを与えてくれる。人口の半分以上が高齢者が占められるというこの地域は、ともすると地方の衰退の象徴と見られがちかもしれない。ところがそうではないのである。今回はこの奥会津における、つながりと支え合いの実践について、全国サミットを通じて見聞きしたことを中心に紹介していきたい。

以前、宮城県主催の地域包括ケアシステム関連の会合を取材させていただいたことがある。その折に、今回の開催地の一つである昭和村の事例発表を聞いたが、そこでの地域の人たち同士を支え合いの仕組みがとても印象的であった。

例えば、同村内の野尻地区では、新聞は集落の一角にある「集合型新聞受け」に配達され、毎朝そこに新聞を取り来なければならぬ。一見不便なようだが、それが支え合いにつながっている。新聞が配達される時間帯には住民が新聞受けの場所が集まってくる。そこで毎朝井戸端会議が自然発生的に行われる。取り来ない人の家には誰かが新聞を持って訪ねていくので、安否確認にもなる。

この野尻地区に商店は一軒あるのだが、この商店もまた集落の人の集う「サロン」になっている。店主は81歳の女性だが、お店に来る人にお菓子や料理をふるまひ、皆売り場の奥にある居間でお茶飲みをしている。お店に来る人もそこで買い物をするのはもちろん野菜や山菜を差し入れたりする。顔なじみの客がしばらく姿を見せないと店主や常連客が電話や訪問で様子伺う。

このように、お互いの支え合いが実に自然な形で行われているのである。「昭和村における支え合いの例」

今回の全国サミットでは、初日は金山町を会場に、基調講演、基調鼎談、活動発表とディスカッション、パネルディスカッションが行われた。開会で挨拶した町長の長谷川盛雄氏の「ないものねだりでなく、あるものを磨き上げる。ここにしかないものを磨き上げて全国に発信したい」との言葉はとても印象的であった。基調講演で内閣官房の「まち・ひと・しごと創生本部」で総括官を務めた山崎史郎氏が「地域づくり」と『人の支え合い』は、実は同じことを言っている」と言っていたが、この奥会津で展開されているのはまさにそうしたことである。山崎氏によると、人口減少地域の地方創生には地域資源の洗い出しとその最大活用などいくつかの共通点があるという。長谷川

町長の主張通りである。奥会津のような地域でこうしたことが進んでいる背景には、地域全体の危機感がある。他人任せではなく、自分たちで何とかしないと日々の暮らしが守れないのである。この点、都市部にはこの危機感がまだ薄いと云わざるを得ない。

「奥会津の暮らしに学ぶ、支え合う地域づくりのコツ」と題した活動発表とディスカッションでは、今回会場となった4町村における地域活動の一端が、当事者の口から語られた。三島町の小柴ヨシノ氏は、代表を務める「西方カタクリの会」の取り組みを発表した。会では廃校となった小学校を宿泊研修施設として再活用している。「社員」は地域の高齢者ばかりだが、地元食材を使った郷土料理や温かいもてなしが好評で、それが皆のやりがいにつながっている。小柴氏の「小さなことでも人の役に立つ、地域の役に立つことをやりたい」

「お互いに自分の能力を発揮できる環境で、自分のできる範囲でやっていくことが大事」との言葉が印象的であった。

金山町の「山人近隣会」という会の一員である栗城英雄氏は、山入地区における集落営農による集落の維持と活性化について語った。農作業の他、水路や道路の保全、道路脇の花壇整備、旅行といった取り組みを通じて活発に交流して孤立を防いでいる。9月に開催する芸能発表会の最後を飾る山入歌舞伎は町内外から多くの観客を呼ぶ。11月の農作物品評会には自分たちの自慢の作物が200点近く集まり、そこで表彰されるのが農作物づくりのやりがいにもつながっているという。栗城氏は、「身の丈に合った自分のできることをやっている」としつつ、「誰でも一歳ずつ年齢を増していくが、住んでいる地域で最後まで暮らした理解し、支え合い、年をとっても楽しく暮らしていけるよう集落全員で取り組んでいきたい」と結んでいた。

昭和村の野尻集落の山内常一氏は、「地域の景観をよくしたい、地域に貢献したい」と設立された野尻営農生産組合における耕作放棄地の農地再生作業についても紹介した。その思いとして山内氏は、「荒れた土地を畑にしておけば、都会から来た人が定住しても野菜を作ることができる」「県外にいる家族たちが安心して暮らせるように、『田舎は我々が守っているよ』と伝えて、いつでも帰ってこれる状態をつくっておくことが自分たちの課題」と語っていた。何より印象的だったのは、「支え合いが豊かさではない。たとえ不便でも周りで助け合うことが豊かさだ」という言葉である。都市部に住んでい

ると、こうした地域での暮らしについてとするとよく事情を知りもせずに「不便そう」「大変そう」などと考えてしまいがちだが、それは決してその地に住んでいる人の実感ではないのである。

会津美里町の齋藤やよい氏は、毎月「日々草クラブ」という会を開いている。使われていなかったコミュニティセンターを活用し、「身近な場所にたまり場」をつくらうと始めた。料理手芸、歌、体操など、参加者が自分たちで活動計画を立てて活動しているが、毎回最後はお茶飲みの時間を設けて、会話を楽しみなながら交流を深めている。齋藤氏は、こうした取り組みは「硬く考えないで1人、2人からでも肩ひじ張らずに気軽に始める」のがよいとして、「平日頃の積み重ねでコツコツやっていきたい」と語っていた。

2日目は4町村に分かれた分科会だった。私が参加した金山町分科会のテーマは「日常のつながりに注目！超高齢化社会を生き抜くヒントは、地域の中の小さな支え合い」で、金山町内の本名地区、西谷地区の西谷あゆみ会、越川・西部地区の住民の方々が登壇した。

分科会の開催に先立って金山町副町長の山内建史氏は、「互いに思いやれる、気に掛ける、一人ひとりが必要とされ、大切にされる風土がここにはある。これは地域における一つの『処方箋』だ」と話したが、金山町内における取り組みからはまさにそうした気風が感じられた。

ここまで見てきた奥会津における取り組み、すべてそこに住む人同士のつながりから始まっていることが分かる。そしてまた、異口同音に言うように、そこに住む人が自分のことができる範囲で、肩肘張らずに自然体でやっていることも特徴的である。

先に紹介した通り、奥会津の町村は東北でもとりわけ高齢化が進み、いわば未

来の日本の姿を先取りしている地域であるが、そこでのこうした支え合いの仕組みは他の地域にとってもきっと参考になるのではないかとと思われる。何より、登壇した地元の方のほとんどは70代、80代である。この地で一番元気なのは実にこの年代なのだと思えると、これからの日本でお手本にすべきはまさにこの地域なのではないかという気がする。活動発表をされた4町村の方々の生き生きとした様子がとても印象的で、結局地域づくりというのは、地域にこうした表情をする人が多くいることなのだと強く感じさせられた2日間であった。

この全国サミットは、人口減少や高齢化が進む中、新しい福祉制度の効果的な運用や地域の福祉・生活課題について、全国の先進的な事例を学び、その解決に向け検討することを目的に、福祉関係者や行政関係者らを対象に年1回開催されている企画である。

執筆者紹介  
大友浩平  
(おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Face book  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

「お茶飲み」を中心とした支え合い  
2日目は4町村に分かれた分科会だった。私が参加した金山町分科会のテーマは「日常のつながりに注目！超高齢化社会を生き抜くヒントは、地域の中の小さな支え合い」で、金山町内の本名地区、西谷地区の西谷あゆみ会、越川・西部地区の住民の方々が登壇した。

分科会の開催に先立って金山町副町長の山内建史氏は、「互いに思いやれる、気に掛ける、一人ひとりが必要とされ、大切にされる風土がここにはある。これは地域における一つの『処方箋』だ」と話したが、金山町内における取り組みからはまさにそうした気風が感じられた。

ここまで見てきた奥会津における取り組み、すべてそこに住む人同士のつながりから始まっていることが分かる。そしてまた、異口同音に言うように、そこに住む人が自分のことができる範囲で、肩肘張らずに自然体でやっていることも特徴的である。

先に紹介した通り、奥会津の町村は東北でもとりわけ高齢化が進み、いわば未

来の日本の姿を先取りしている地域であるが、そこでのこうした支え合いの仕組みは他の地域にとってもきっと参考になるのではないかとと思われる。何より、登壇した地元の方のほとんどは70代、80代である。この地で一番元気なのは実にこの年代なのだと思えると、これからの日本でお手本にすべきはまさにこの地域なのではないかという気がする。活動発表をされた4町村の方々の生き生きとした様子がとても印象的で、結局地域づくりというのは、地域にこうした表情をする人が多くいることなのだと強く感じさせられた2日間であった。

ここまで見てきた奥会津における取り組み、すべてそこに住む人同士のつながりから始まっていることが分かる。そしてまた、異口同音に言うように、そこに住む人が自分のことができる範囲で、肩肘張らずに自然体でやっていることも特徴的である。

先に紹介した通り、奥会津の町村は東北でもとりわけ高齢化が進み、いわば未

来の日本の姿を先取りしている地域であるが、そこでのこうした支え合いの仕組みは他の地域にとってもきっと参考になるのではないかとと思われる。何より、登壇した地元の方のほとんどは70代、80代である。この地で一番元気なのは実にこの年代なのだと思えると、これからの日本でお手本にすべきはまさにこの地域なのではないかという気がする。活動発表をされた4町村の方々の生き生きとした様子がとても印象的で、結局地域づくりというのは、地域にこうした表情をする人が多くいることなのだと強く感じさせられた2日間であった。



執筆者紹介  
大友浩平  
(おおともこうへい)  
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。  
「東北ブログ」  
http://blog.livedoor.jp/anagmasi/

Face book  
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

「お茶飲み」を中心とした支え合い  
2日目は4町村に分かれた分科会だった。私が参加した金山町分科会のテーマは「日常のつながりに注目！超高齢化社会を生き抜くヒントは、地域の中の小さな支え合い」で、金山町内の本名地区、西谷地区の西谷あゆみ会、越川・西部地区の住民の方々が登壇した。

分科会の開催に先立って金山町副町長の山内建史氏は、「互いに思いやれる、気に掛ける、一人ひとりが必要とされ、大切にされる風土がここにはある。これは地域における一つの『処方箋』だ」と話したが、金山町内における取り組みからはまさにそうした気風が感じられた。

ここまで見てきた奥会津における取り組み、すべてそこに住む人同士のつながりから始まっていることが分かる。そしてまた、異口同音に言うように、そこに住む人が自分のことができる範囲で、肩肘張らずに自然体でやっていることも特徴的である。

先に紹介した通り、奥会津の町村は東北でもとりわけ高齢化が進み、いわば未

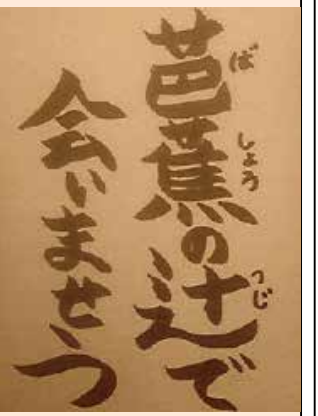
来の日本の姿を先取りしている地域であるが、そこでのこうした支え合いの仕組みは他の地域にとってもきっと参考になるのではないかとと思われる。何より、登壇した地元の方のほとんどは70代、80代である。この地で一番元気なのは実にこの年代なのだと思えると、これからの日本でお手本にすべきはまさにこの地域なのではないかという気がする。活動発表をされた4町村の方々の生き生きとした様子がとても印象的で、結局地域づくりというのは、地域にこうした表情をする人が多くいることなのだと強く感じさせられた2日間であった。

ここまで見てきた奥会津における取り組み、すべてそこに住む人同士のつながりから始まっていることが分かる。そしてまた、異口同音に言うように、そこに住む人が自分のことができる範囲で、肩肘張らずに自然体でやっていることも特徴的である。

先に紹介した通り、奥会津の町村は東北でもとりわけ高齢化が進み、いわば未

来の日本の姿を先取りしている地域であるが、そこでのこうした支え合いの仕組みは他の地域にとってもきっと参考になるのではないかとと思われる。何より、登壇した地元の方のほとんどは70代、80代である。この地で一番元気なのは実にこの年代なのだと思えると、これからの日本でお手本にすべきはまさにこの地域なのではないかという気がする。活動発表をされた4町村の方々の生き生きとした様子がとても印象的で、結局地域づくりというのは、地域にこうした表情をする人が多くいることなのだと強く感じさせられた2日間であった。

連載  
むかしばなし



第四十三話  
宿命の女王

泰衡の掌中にある柿の実

「丹十郎・いつもの実と輝きが違うな。」

「この妙な結果が張つてある、奇つ怪な土地のせいだな。張つた人間も何が起るかはわかつてない。俺もその実の妖しげな力には責任負えないな。」

「ははは、柿の妖怪が言う事か・だが某、この柿の覚かな？周りの景色が！」

「確かに・これは新しいな、丹十郎。だがこれは錯覚かな？周りの景色が！」

「泰衡の目には、急速に東から昇り天空を横切っていく太陽が見え、一瞬、軍隊のようなものが押し寄せたかと思うとあつという間に行き過ぎたように感じた。触れた感触も全くなかったが・紛れもなく、明日にも広瀬川を越えて攻め来るだろう、頼朝の大軍の姿。」

「うわっ」「な、何だ！」

「太陽が！朝が！いや夜が！」周りの全員が同じ光景を目にしているらしく、驚愕し、混乱している。皆で幻想を共有している・いや、この光景は・」

「この先に起こる出来事が早回しに流れていく！しかもこれは視覚のみだ・」

「長里国八郎が叫んだ。太陽はもはや、一秒で飛び去るほどに早く、朝と夜で世界ごと点滅しているかのようだ。」

「いかん。丹十郎も、柿の樹も、どこかへ消えたな」

「炎天、雨、嵐、地震・」

「全部が一瞬。皆が目まぐるしい光景の中において、立ち尽くしていた。日の出から日の入りまでは既に一秒もなく、ますます早まって活写写真のコマ送りのようである。激しく点滅する光景の中に、見知らぬ人影がひとつ、出現した事に泰衡は気づいた。」

「それは貴族風の被衣(かぶぎ)の装束で顔を隠しているが、若い女のようなだ。」

「今日は、タキサ。」

「女は明らかに、少女・若者を目指して歩いてきたのだ。つまり、憑依する方とされる方、両者が顔を突き合わせて出会っている事になる。」

「貴女が・阿古耶姫様」

「若の聲は震えている。」

「いかに・この度はお世話様ね、タキサ。」

「タキサは昔の名前です。今は若です。」

「タキサとは、母が父・喜善との内縁であった為、生まれ直後に喜善の実母の娘として戸籍登録した時の、親類がつけた仮の名前。」

「タキサは危険だけれど計り知れぬ力のある名前・私は好きよ。」

「彼女、人を超えた存在・自分の中において、自分しか知らない事、自分が忘れてしまった事まで知っている。ならば私にだって、相手を知る権利はあるのではないか？若の中で、不公平感に対する憤りが生じる。」

「貴女は、トヨという方の命を狙われている・」

「それは正確ではないね・トヨそのものになる事が、私の使命なのだから。」

「トヨさんに・なる？」

「思いがけない筈に、少女はたじろいだ。」

「内裏様のお望みは、トヨの持つ、国の運命を握る力そのもの。私は、その力を持ち帰らねばならないの」

「他の面々は、周囲の光景に依然心を奪われているよ。うで、この不思議な女人の登場と、少女との会話には全く気づいていないように見える。泰衡もまた、視線を四方に泳がせて、自分もそうであるように装う。」

「我は其の方の記憶を感じ、全て知っているのに、其の方を我をまだ知らぬ・遙か未来から来た乙女よ。」

「突如、阿古耶は少女に迫り、ぐいとその肩を掴んで引き寄せ、互いの額を付き合わせた。次の瞬間、若の心に火花の如き衝撃が走る。」

「他人の記憶を我が物とするには、修練がいる・我は少しづつ、其の方の中へ流し込んでやるよ・」

「若は一瞬のうちに、常人ならぬ古の女・その記憶の一部を我が物にした。」

「出羽へ赴くと同時に、阿古耶は七人の家臣を奥羽全土へ遣わしトヨを探索させる。トヨは八幡平の馬の民と共にいる・阿古耶は旅人を装って近づき、ある夜暗殺し髪を切るとうとする。」

「それがトヨを己と同化させる方法だったから・けれど、トヨの石によつて見えぬ力で跳ね飛ばされ、阿古耶は逃走する。」

「刺客」の失敗が伝わり、内裏は奥羽への侵攻を本格化させていく・」

「阿古耶の心には恐れがある。このままでは内裏に見捨てられる・だから必死の思いで何度もトヨへ挑む。だがあの石がある限り、阿古耶は決してトヨに近づけず、この不思議な女人の現れたのが名取太郎だった。空から落ちた種より伸びた樹に登り、化け物となつて降りてきた太郎・彼は綾糟という男との戦いで傷つき、出羽に逃れてきていた。阿古耶はその怪しき力を利用してと考える。しかし太郎は決して荒くれの獣ではなく、理性的な知恵者の一面があった。」

「あの女と同化するには相当の覚悟がいる・あれが背負う宿命というのは桁外れに重いもので、おそらく朝廷もろくにその事を知らぬ、というのだ。」

「そう聞くと、使命云々以上、トヨについて興味を引かれてしまう。阿古耶はトヨに家臣を近づけ、情報を集めさせた・」

「放射線量は信じられないほど低い・地上でこれほどの場所は初めてだわ。」

「トヨハが左腕に嵌めた計測器で空気を診断している。やはりか。では、サイドの人々がここに降りて暮らせる可能性は高まったな」

「そういう賢治に、女は首をすくめて応える。」

「それはどうかしら・この土地だけが安全でも、外の世界と隔絶されたままで海にも河にも接触せず生きていけるかどうか。」

「河か・では、広瀬川も計測してみては。」

「喜善の足取りは心なしに浮き立つて見える。たとえ廃墟の姿でも、誰も見た事のない遙か未来の都市・仙臺なのだ。三人は十字路を南へ進み、青龍号が宙に浮いたまま主人らの後に続く。舗装されていた路面は砕けて、草木が所々から突き出して歩くには注意が要る。」

「センダイか・しぶとい土地も、あつたものね。」

「困るような口ぶりですね。トヨハが呟く。」

「喜善が振り返って笑う。」

「ああ、御婦人はまだ何かエライ事を隠してお出でようです。」

「賢治の指摘に、女は立ち止まった。フツと笑うと、」

「正直に言うとな・私は、ようやくと人類が減びてくられるかと、ホツとしかけたのよ。」

「と言いつつ、喜善が驚く。」

「ど、どういう事ですか」

「ふふ・私が何のために、何百年にも渡つて、何百回も死んで生き返つてくるような苦行を続けてきたと」

「さあ・トヨハさん、あなたの王国は、一体どうして滅んだんだろうかね？」

「賢治はまるで容疑者に対する探偵の如く問いかける。」

「滅んでいないのよ・まだね。二千年以上、滅亡を保留にしているのよ。」

「喜善が目を見くする。」

「お話ししてもなかなか解つてもらえない内容だと思つけれど・私の王国では、この星全体を巻き込む禍が起つた。だから島ごと消去したの。異次元に放り込んで、いつとも知れない未来へ送り出した・この石がゲートを開ける鍵よ。」

「何てこつた！世界を滅ぼす王国が、未来に出現するだつて？」

「だが、世界は既に破滅しているじゃないか。」

「ダメなのよ！希望が残っているうちは・放つておけば、六つのサイドもじきに滅びて、私は世界で最後の人間になる・その時が、この石を破壊する時。私は、父に誓った。」

「この仙臺の地が、邪魔だという事か・」

「トヨハは首にかけた石を掲げる。」

「まさに今、この場所に、私の古代の王国を出現させる事もできるわ。この奇跡の場所も、全て今度こそ破壊されて・無かつた事にできる訳」

「もう、嫌になつたのかい？生き続けるのが・重責を負い続けるのが？」

「私は・自分の人生を忘れるのが嫌なの。確かに三千年近く生きてきたはずなのに、結局、その思いは消えてしまう・十三歳までの、王国の悲惨な記憶が、いつまでも鮮烈に残るだけ」

「錯覚だろうか・女が掌に握つた青黒い石が、紅く光り始めたように見える。」

「待って・トヨハさん、君は今、どこにいますか」

「突然、喜善が問いかけた。」

「ここは、蝦夷の国です・君は、奥羽の女王だつたと、昔の君に聞きました。君は・なぜ、僕らの国に長く留まつてくれていたのですか？中央政府に長年追われながら」

「トヨハは呆然としていた。喜善は歩く。賢治もフツと微笑み、彼女をそれとなく促しながら、後に続く。」

「貴女が忘れていても、それが嬉しくて、何だか誇りです。」

「喜善は立ち止まっていた。そこにあつたのは、まさに夢に出てきた場所・仙臺の、「光原社」だつた。」

「次回予告」

「年明けからは待たなし！頼朝怒涛の進撃と、仙臺決死の大歓迎、じやなかった大迎撃が展開。広げた大風呂敷しかと回収できるか？」

「」



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出没し演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当



落ち葉

## シリーズ 遠野の自然 「遠野の大雪」 遠野 1000 景より

ほんとうに光陰矢の如し  
で、もう師走である。歳を  
重ねるほど一年が短く感じ  
られるのは、分母が大き  
なるせいだと誰かに教えら  
れたが、今年は特に早い。  
振り返るといふんなこと  
が思い出される。今年の気  
候もおかしかった。異常気

象の連続で、変則台風もあ  
った。通常の四季ではな  
かったので、じっくり季節感  
を楽しむ余裕もなかった。  
せめて今回号の「遠野の  
大雪」の写真で、冬本番を  
迎える直前の色鮮やかな景  
色を楽しもうではないか。  
「落ち葉」の繊細さはス  
ロ―動画をみているようだ。  
「高清水からの夕焼け」  
の色彩はソクソクする。  
「晩秋」は一幅の絵画で  
あり、「朝霧」は遠野なら  
ではの景色だろう。  
「仙人池」はこの世なら  
ぬ風景で、「雲」は山が怒  
っているように見える。  
「秋色と鳥居」の木は30  
メートル以上の高木。  
最後に「紅葉」のみごと  
さで今年一年を締めよう。



晩秋



高清水からの夕焼け



仙人池



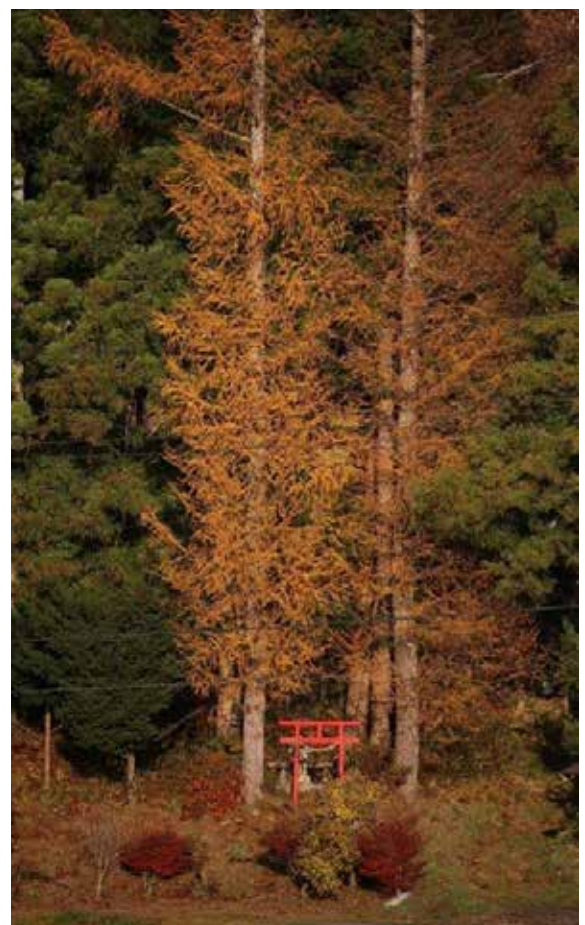
朝霧



紅葉



雲

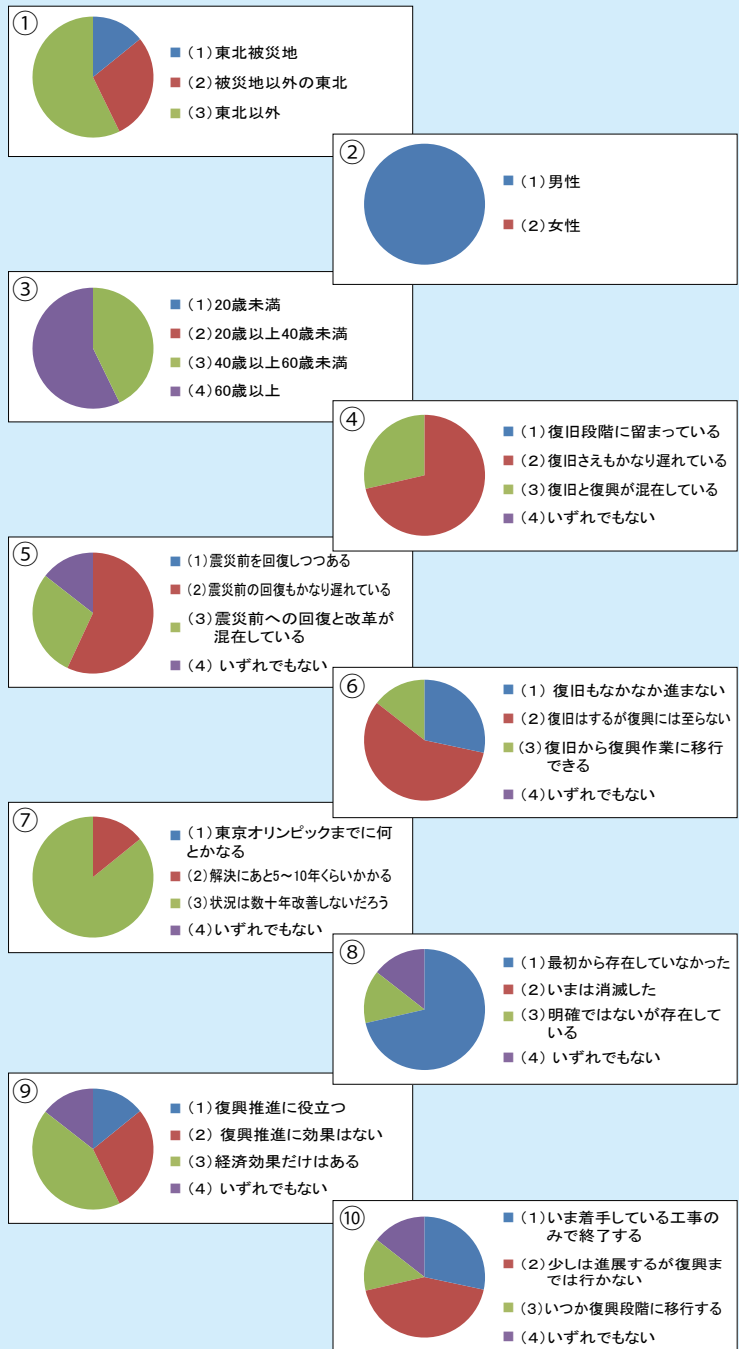


秋色と鳥居

## 第54号 ネットアンケート集計結果

### 【「復興」ではなく「復旧」で終わるのではないかな？】

NO.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	1
	(2) 被災地以外の東北	2
	(3) 東北以外	4
②	性別	
	(1) 男性	7
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
④	現段階の復興作業への評価レベルについて	
	(1) 復旧段階に留まっている	0
	(2) 復旧さえもかなり遅れている	5
	(3) 復旧と復興が混在している	2
⑤	設問4のご回答の理由は何ですか？	
	(1) 震災前を回復しつつある	0
	(2) 震災前の回復もかなり遅れている	4
	(3) 震災前への回復と改革が混在している	2
⑥	復興作業はこれからどう展開するか？	
	(1) 復旧もなかなか進まない	2
	(2) 復旧はするが復興には至らない	4
	(3) 復旧から復興作業に移行できる	1
⑦	福島第一原発問題はどうか？	
	(1) 東京オリンピックまでに何とかなる	0
	(2) 解決にあと5~10年くらいかかる	1
	(3) 状況は数十年改善しないだろう	6
⑧	復興ビジョンはいまも健在か？	
	(1) 最初から存在していなかった	5
	(2) いまは消滅した	0
	(3) 明確ではないが存在している	1
⑨	東京オリンピックは復興に役立つか？	
	(1) 復興推進に役立つ	1
	(2) 復興推進に効果はない	2
	(3) 経済効果だけはある	3
⑩	最終的に「遅れてくる復旧」で終わるか？	
	(1) いま着手している工事のみで終了する	2
	(2) 少しは進展するが復興までは行かない	3
	(3) いつか復興段階に移行する	1
	(4) いずれでもない	1



やはり「復旧」も進まず、「復興」は無理か  
今回は「復興」ではなく「復旧」で終わるのではないかな？」であった。最近このアンケルからのニュースが減ったように感じたので取り上げてみた。回答者数はわずか7名。

④「現段階の復興作業への評価レベル」は「復旧さえもかなり遅れている」が5票で圧倒的。

⑤「設問4のご回答の理由」は「震災前の回復もかなり遅れている」が過半数。

⑥「復興作業はこれからどう展開するか？」も、「復旧はするが復興には至らない」が過半数。

⑦「福島第一原発問題はどうか？」は「状況は数十年改善しないだろう」と厳しい予想が圧倒的。

⑧「復興ビジョンはいまも健在か？」は「最初から存在していなかった」が圧倒的で多少予想外だった。

⑨「東京オリンピックは復興に役立つか？」は「経済効果だけはある」が3票「復興推進に効果はない」が2票で続く結果だった。冷静というべきか。

⑩「最終的に「遅れてくる復旧」で終わるか？」は「少しは進展するが復興までは行かない」が3票で、「いま着手している工事のみで終了する」が2票で続いた。依然として厳しい復旧・復興状況というのがアンケート結果から読み取れる。

### 編集後記

三陸酒海鮮会日  
本橋が今月初めの会を最後に終了してしまいました。そこから約一週間が過ぎてこの原稿を書いていますが、やはり長く継続していたことが終わるとするのは非常にさびしいものです。

しかし、ずっとモヤモヤしていましたが、ようやく正直な気持ちを今回号で表わすことができました。

同時に、まだ渋谷があるのです。そこらをもっともっと継続させようという気持ちで新たにすることができました。そんな思いが全面に出たのが3面の記事です。

渋谷の前回は、とにかくすごい種類と量の東北地酒でした。開催場所のお店である「焚火家」さんが、東北六県から万遍なく選んでくれました。

参加者もみな驚いていました。大勢の日本酒党が集まりましたが、さすがに全種類は飲めなかったようです。十五銘柄ですから、一合ずつ飲んだら一升五合、その半分でも七合五勺、10合ならば五合。それでもへべれけどころか倒れてしまいます。

一応酒飲みのお席に連なるのを自負する筆者でも、試みはしましたが、全銘柄踏破は無理でした。(笑)

こうした会をこれから先もずっとずっと継続していきたいと思っております。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- プロジェクト募集要領
- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由(プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ ✕切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

- 連絡先/企画提出先  
(郵送) 〒207-0005  
東京都東大和市高木3-815-1  
ホームタウン宮前2-2  
電子タブloid新聞【東北復興】宛  
(メール) yumuyu@wj8.sō-net.ne.jp
- ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと思ひます。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)
- たくさんのご提案をお待ちしています